





筑前魯軒林守篤 編述

# 畫筌

浪華書肆

保壽堂 彫刻  
養心堂



## 畫筌卷之一

### 六法

一曰氣韻生動

守篤竊按此語是八經之鬼神人

物鳥獸草木禽畜事之氣也此皆靈氣之會也

目之氣也此語之氣也此語之神也此語之神也

二曰骨法用筆

骨法之畫之骨法也此語之神也此語之神也

骨法之畫也此語之神也此語之神也

筑前直方 隱士魯軒林守篤 編



才二は流古より今もまて名人の流儀を習ふる格の  
筆格と云へ混雜の格も心と付てまへに格よひよりく  
ら格と云へ格又ハ眞の筆の三格と分る一大中小の  
筆格と能く心と用て作しこの如く書畫の骨法は  
工人と云へ一息といふ弱重賦硬平の七圍あり  
滞り多と格よし知らむてハ言語も述る記味ひを  
多し一陰ハ固ハ游蕩の才ハ一國家の重寶とてより  
くこれものなりと

三曰應物寫形

おその形と物毎に好相應す其  
格よりまて筆と云へ一筆は天子の位貴傷候ハた如の  
風とわたり一樹ハ硬若ハ柔あるの敷く又絹や紙をん

四曰隨類傳彩

大小は依てお應する格よす也一  
一又陰の質畫の眞草行は固て陰の深源深沈  
と作し

五曰經營位置

經營とてよりいふ心とて之換格と標  
よく地盤と出はるのこけ絹の中より人物といふかどり事  
形像ハかくのまゝにいふと一と物ハ又序風ありて花を  
とがらんよ先端の一二枚めを畫の技よりありて大樹  
と云へ下よハ先と云同くは藤より草花牡丹かと  
の敷とまて下る格より一と後よハ心と云まて氣の脱ぬ  
格より一大樹の格ハ地引とて採消木の障は六若川と



わひしらの三回牧め、格を下に校より、下りの格  
 地りてた多と一敷を介中禽と処る、人念同くこの  
 可記格に配て出又中鳥と二川もこのも支て換格を  
 用ひたる格、又六牧め、いふと云筆の無事記る、  
 仙かごと申口時の記ぬ格、鶯、鶉、水札、おと申て、  
 上よの流、中よと申、そを、下よ小鳥と飛せ、遠心かごとぬ  
 申て、凡て恰好よと格、目算す、り、理管、目算て  
 描列、位置あ、し、婚姻の屏風、忘ものわりぬれ  
 つね去、し、山鶴、又、お、不、音の敷を、と、お、魚、し、し、  
 遠花か、し、花の、君、子、と、て、周、子、の、巻、し、し、と、貴、ひ  
 用、ひ、し、と、あ、な、り、し、

六曰傳模移寫 臨通、人より、繪本と傳、又、  
 地と志、る、紙、は、吹、て、是、と、膠、畫、中、一、の、實、と、是、と、粉、中、  
 と、云、ひ、る、り、と、云、し、凡、画、を、子、は、粉、中、と、字、に、と、是、粉、  
 と、凡、粉、中、と、か、さ、る、時、画、と、あ、と、わ、ら、す、目、利、も、あ、り、  
 粉、本、と、以、て、一、流、と、云、又、その、字、に、る、格、と、云、る、り、  
 古人の筆、跡、と、多、集、て、見、列、の、描、是、の、力、か、く、  
 目、利、も、あ、り、初、心、の、時、画、し、て、は、中、心、の、力、か、く、  
 難、く、あ、り、す、先、派、あ、り、後、派、印、の、力、か、く、  
 一、流、く、り、  
 一、二、品、  
 氣、韻、生、動、出、於、天、成、人、莫、不、觀、其、巧、者、謂、之、

神品  
 氣韻生動出於天成人莫不觀其巧者謂之



神品 愚識人生れて二三歳の比より畫之をみて常く  
 の好む處に法と好て描しと欲する小兒とて其後をかくと  
 する名人の跡を好て習りて功至業熟し其若くは人  
 是より及らざる者指とて其皆神靈と具足之に  
 妙品 筆墨超絶傳深得宜意趣有餘者謂之妙  
 品 術を好む者一格式と趣法と教て描といふも法と  
 能品 得其形似而不失規矩者謂之能品 吾法と  
 ちて格式と意と一なり作は是と師者といふ又若人及さる  
 ものなり

十二心

元 饒自然曰一忌置拍密二遠近不分三山無氣脉  
 四水無源流五境無變險六路無出入七石只一面  
 八樹少四枝九人物偃僂十樓閣錯雜十一瀟淡失  
 宜十二點染無法

右五翁畫傳より

制衣作楷摸

帝王天日龍鳳乃表と崇以儒賢ハ忠信礼義の風を  
 あらひ以武士ハ勇悍英烈の顔と多しと貴戚ハ侈靡を  
 尚し隱逸ハ清世の節と識す仕女ハ秀色姝媚乃  
 慈に宜し一田家ハ醇醜扑野の真あり 教儀ハ各巧方便  
 乃顔あり 道流ハ修真度世の範と具以 外夷ハ華を慕  
 欽順の情あり 天帝ハ威福嚴重の儀と明し 鬼神ハ



醜醜馳進の状と作以畜獸の筋力精神毛骨騰起  
 を倚る處ト禽鳥は毛羽翔るを舉り飛集の飛と尚  
 魚龍は游泳の妙升降此宜ことと水は湯々  
 動々人をして浩然江湖の志のあらしむ屋木は  
 鬱鬱均壯深遠空々透す花竹は四散乃  
 景候あり陰陽入向背荀條の老嫩芭蕉の后之自  
 然艶柔間野園蔬の野菜咸出と出るの体性なり  
 古く外古人乃高論多しといは初人の者乃知るに  
 故にこれと畧に

山水と觀賦

山水と山川海人家をく

凡山水と畫に之を寫すのせんは在里大山尺樹寸草

人此を法なり遠人目をく遠樹枝あり遠山皴なり  
 隱こくと眉の如く遠水波あり雲と林一はとの  
 決なり山腰の雲塞り石壁の泉水塞り樓閣の樹塞り  
 乃路に人塞り石の三面と有す此をの訣なり凡山水を  
 畫す尖峭もの峰平夷なりもの嶺峭壁もの山崖  
 空わる者の岫石よりもの巖形圓なりもの巖面  
 と夾もの壑と山水と夾もの洞水川は渚もの溪泉  
 通る者谷路下のお山の坡月と極平夷なり者坂なり  
 能辨別せし別山水乃彷彿なり知や其を觀るなり  
 凡氣象を看は清濁と辨一賓主の結構と分形  
 の威儀を列ぬ多かれん別亂る少かれん傍る多し



少くす遠をと知んと覺せんと遠の山水と連つて  
 得と心腰の骨と回抱し安んずると觀よ新居記地よ  
 小橋と雲へし流るる水よ人びわりの山に木あり  
 岩の崖の石の根と露して藤纏流し石の山に  
 空より水痕あり凡林木と修して遠の川流平よ  
 別高家より葉ありもの枝葉よまの木の硬松  
 皮の鱗よ似柏皮の身は纏ひ生ずる者ハ脩長し  
 石よ生ずる者ハ卷曲して修外古木の葉多し  
 死守寒林ハ扶疎して蕭林より凡山水と盡し須  
 四時と按て一春景ハ川旁消徑幾樹木隱  
 して遠水よ藍と標ひ色堆まなり夏景ハ別林木

小散ひ緑の平坂雲と雪牙瀑布水よ近く  
 別水天一色に流るる疎林馬欄寒よ標ひ  
 鳥の冬景ハ別地と雷よかた老松影よ  
 傍ひ水沸く沙平よて凍雲黯淡より酒旗孤村あり  
 風雨ハ別と地と分と東西を辨し  
 の蓑衣あり風よてぬるハ但樹枝と看よぬる風  
 少の枝葉下り雲よぬる雲の天際より薄  
 霏霭る山之翠と流し網と斜暉よ晒す暮景ハ別  
 山落日と啼よ帆ハ江濱よ節人紙急よて半の柴  
 と捲よ或煙斜よ雲捲よ或の遠岫よ雲海よ或の  
 秋江よ眺よ海よ古塚新碑  
 景法布置以文字



畫の成るは神の力に在りて人の手は之を成るに過ぎず  
すべし其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
すべし其の成るに神の意を以てし人の心を以てし

畫論傳受秘事口訣

夫畫の成るは言語文字を以てし其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
心通すべし其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
得るその言語文字を以てし其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
味なり其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
字なり其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
知て神の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
六法三品或は何人の流といふことと云ふされ其の成るに神の意を以てし人の心を以てし

あり是と上より又其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
神の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
を神心者と云ふことと云ふされ其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
功者となりしことと云ふされ其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
妙品なりしことと云ふされ其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
聖い生なりしことと云ふされ其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
畫聖と云ふことと云ふされ其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
心は神と常なることと云ふされ其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
神の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
勤ても上功なりしことと云ふされ其の成るに神の意を以てし人の心を以てし  
は粉本と云ふことと云ふされ其の成るに神の意を以てし人の心を以てし



いし守義答て曰畫本と用どして毎るは我をこり  
 修く描もの下子の不敏者なり粉本と用んを欲せぬ  
 われ描るは畫品ありと曰凡常人の難く唯速者  
 なる者といふ是も固てこり學も異端も落入り終り  
 名とう教と好し是學者の深く勉じまや他又一種  
 わり功者より上方の各別なり論ずり及んす毎るの  
 粉本と用て古人の規能と遠く正るを描んと欲する  
 者の已り勉を知り古人の聖なりと悟るるも亦た  
 畫のなるは此と自ら情望と教し神靈と操んと  
 然る者之を勉めておれと功を成し描と必も若る  
 之と背されんたり

○ 師守房曰畫の要は輕

乃一字止の故も意以て輕くかくと書て之を輕と心  
 難くたり故も初學者の畫品皆此も此を以て輕の畫  
 の性なりと知しとて極彩色の強なりといふは輕の  
 こととわきまをりて其意は傳あり筆法を以て述す  
 是大秘りと心得しと心點して心通するの妙也○此  
 下師曰の二 陰の實外あるよし是の意を極して  
 とも強む描て之を靈が去て活す 墨色 墨を  
 潤らうと或人曰潤は自然の妙也此は傳あり描るは  
 しくかき扱て替てぬ又深墨も淺墨も筆も多  
 合く濁る極も墨とりて書んぬわれも必は活あり  
 て佳なり予退てぬと家も合言し

骨法 骨法は



直れりと以てより一尺只端までも好く筆と浮きす流  
 ありす所のきともあつてさうとすへ一或曰然に大極すま  
 筆勢とわらへ一及心いさくと利に出来てはら歌  
**筆勢** 筆勢の強弱より弱ければ強へさあやゆに揮て  
 精心えあつてす昨並元流て曰守信極す不地も急紙は  
 事なる紙多の破れを敵事とあはる是筆勢の強弱  
**習畫法** 法と筆より法とせんと思ふと先粉中とんて  
 燒筆よて大形を些くとし紙の大小を意する極すて  
 よくいそ内よりよく燒筆と付て好そ軽くらひ又粉  
 中とんてすへ一師の曰初ん時より粉中とん合中  
 中遠より極すすへ一又大概法の乃と好むとて強

て法中とせんと思ふと先流を光流とく筆勢  
 死すり之強とて神の者さうとすれは法の中  
 辨ほらひて極筆より一強むへ一〇畫工とて  
 者ハ方よりあつて大彩色より上なり大筆法とよく中  
 面目之先粉中とんて強て筆法とすそよ紙中地を  
 して速筆粉中とて燒筆と付て人合也若に好む  
 將くらひ筆よて何中なも中て法の中と腕は是よ  
 そのうちよ筆勢よんと付て非筆の中と極すすし  
 但神の時の心持うたものおれく只年月へて自ら好む  
 〇ささだうしは法と筆よは為業の如く度廣さ  
 ものいん指めて紙を振敷とすてすへ一御され



わづらとして氣が脱てわ—— **描草木法** 草木の枝葉

花のわけて叶のわたりは草木の枝葉のわづら  
一 人の氣のなま文裡すくわづらより 古人の多く  
中なるもわり尚流をて用ととなり○草木のなま  
と中よ只も口筆をて禁ずといひ一凡畫家よを論じ終  
凡俗子終て陽教ますへ—— **筆法** 筆法は吳風と好へう  
す或は切へき所と切と継へきを絶て終て氣のわづら  
と付へ—— **草子** 草子と並らわく筆をありあを  
あてをてく終—— **私人** 私人をも凡人を描めくすへ—— **尚**  
世流と習て終てよく終てあをく終—— **寫形法** 物の形と  
描ま若生り終てあをく終て又生り終てあをく終

生り終てあをく終てあをく終てあをく終てあをく終  
は是別法乃法傳文口訣之門よ入りて是と知てあを  
くす是初人の及ぶあをく終てあをく終てあをく終  
無学の評判と云て突て用お終てあをく終てあをく終  
あり凡法と云ふよあをく終てあをく終てあをく終  
をささあをく終てあをく終てあをく終てあをく終  
**彩色法** 彩色は

初学の終てあをく終てあをく終てあをく終てあをく終  
と終てあをく終てあをく終てあをく終てあをく終  
終てあをく終てあをく終てあをく終てあをく終  
終てあをく終てあをく終てあをく終てあをく終  
終てあをく終てあをく終てあをく終てあをく終



あり意用元はあつらふ九功の者ハ此法と名争ひて色彩  
 の後意なる必も其なりといふは其時を以ての事とす  
 ぬ之大擬其旨と其たても機は意なりあつたは爲意ものこ  
 ○彩色ハ機は意す機は情とて意は意は情に機は地法の  
 真行草と云ふ真の行ふの草は地のまはりの草の草の仍  
 草の草を云ふとあり大旨描にあり少くは法より彩色  
 いふは古筆の法といふは當流に比して描にあり彩色  
 のれを云ふも依りて彩色の法も軽と法とを忘す  
 や法をといふは肝要に此法の味いとよめり堅実なるも  
 うたつた實ありて亂雜なるも乃ちあつたす唯中なるて  
 法況とて合せんとて此法一とてつらりと流るる法のこと

とてふらうといふとく色不及はく時中す此の思案と週  
 へり○彩色ハ筆と用さるり性て悔るす是ハ塗出也  
 又塗つたわとに悔て扱ふてさうもこと塗て及周くあり  
 故に固く色れを扱ふ筆ハ具と多く含まてさうもこと  
 筆をけくして此の扱ふやうに又色海の扱ふ中す浮  
 り物よぬるる一括へ乾乾汗かく文程ありな物れを  
 扱て週て潜焉ありて是ハ秘わりの紙ははよく當りなり  
 といふの毛紙の紙はわさぬ扱ふ宜と此をさうもこと  
**肝要** 凡て法と筆ハ意法えらうする大  
 正心事と純潔とせり極度の法よりたはんと又模  
 範とせらうとせり此をさうもこと扱ふは彼よて  
 其



活物も三分うてそ一川程おのほらひ義ありみゆふ  
 主一物字のさとゆた意おすかすかひ入と合すし  
 白紙も換極の内なれどもいねさつ一草本もは用乃  
 枝葉と申へうはとも万物皆あり異國の法ハ文のゆく  
 大和の法ハ物のみ一と之法ハ物のうら結ハ法のさとも  
 かつり異國の法ハ実さして深く風雅うたは是家那の  
 屋本にはよされ工なり大和法ハ屋上とまて序中一を  
 殿にも家本の函在今子起一教明なり我探幽流  
 又千果外子秀て奇妙と出たり **地挽法** 屋本の比拈ハ雲  
 と爲して二三節引へしおすれし和子かつらうとし  
 てよ一永真脚子の雲と拈とて一三節引を拈子比

引とすまて厚と出て若志ま乳深なれむのや一浅  
 くれとまらばん合所ある草字の法ハむくく子  
 孔のお極なれき一強ぬが面白一徳綱ハ心よす海  
**總論** 活右の能畫の人万物と描まを極あり  
 もわらばるる長と用く魚中ぬと改へ一とんの中水ハそ  
 比は強と一とみれと半禽獸も悉くハ教しわとんは  
 担地の敷し亦志り置供わさしや○本朝古今  
 畫士名義なる者多一徳といはれりは能畫の未曲  
 かりよハ志りばを貴就す一隱畫ハ實之真之經  
 之優法ハたてそま之權なり(萬張と探しむく子  
 輕す一美すれん氣の脱てわくと之○凡法ハ何人



の流おどろくことなきこととて物とのたを人この手形は  
固く風加りて流るるなり○法と云ふ是のたより  
何程若くして動ゆるたがなる遠きを望むることと  
○悉用子生得者も古法と不編して近きなる流り  
私に描き盡すのたより及びて異端の邪法となりて畫  
のたより遠くと云ひて粉中と用ふるよふもの生得能  
画のたより多く朱を用ふるは禁に朱色多しは  
○尚家より多く朱を用ふるは禁に朱色多しは  
絵共につらとす○このよき又聖像などの色と用ひ  
他程より好むかと云ふなり○雪舟の絵より草など  
と板判として押出らるると多しと云ふ○土佐の傳人なり

古法眼より軽くして奇妙ありは依は爲用の務るる者  
元佐は他所の務るる者こととす○元佐の筆の扇風は  
日月と金瓶或は赤銅などそすのなて推舟鳳凰は  
頭の水やと暗縹細まきと云ふは流るるれと禁  
○筆の流るる眼を流るるてせらるる師曰はし流るる  
わづら工匠らよと云ふこととす○松雪の不用用なりは  
間下上の筆も好むこととす○師曰畫はと云ふ  
や顧愷之 陸探微 張僧繇 吳道玄 これごと  
○衣笠守昌はちち房れ法を羨稱して云ふも元佐  
者も人物の勝ると云ふこと○松の茂枝をくし守昌云  
年月公と用ふ必より人

押朱印法

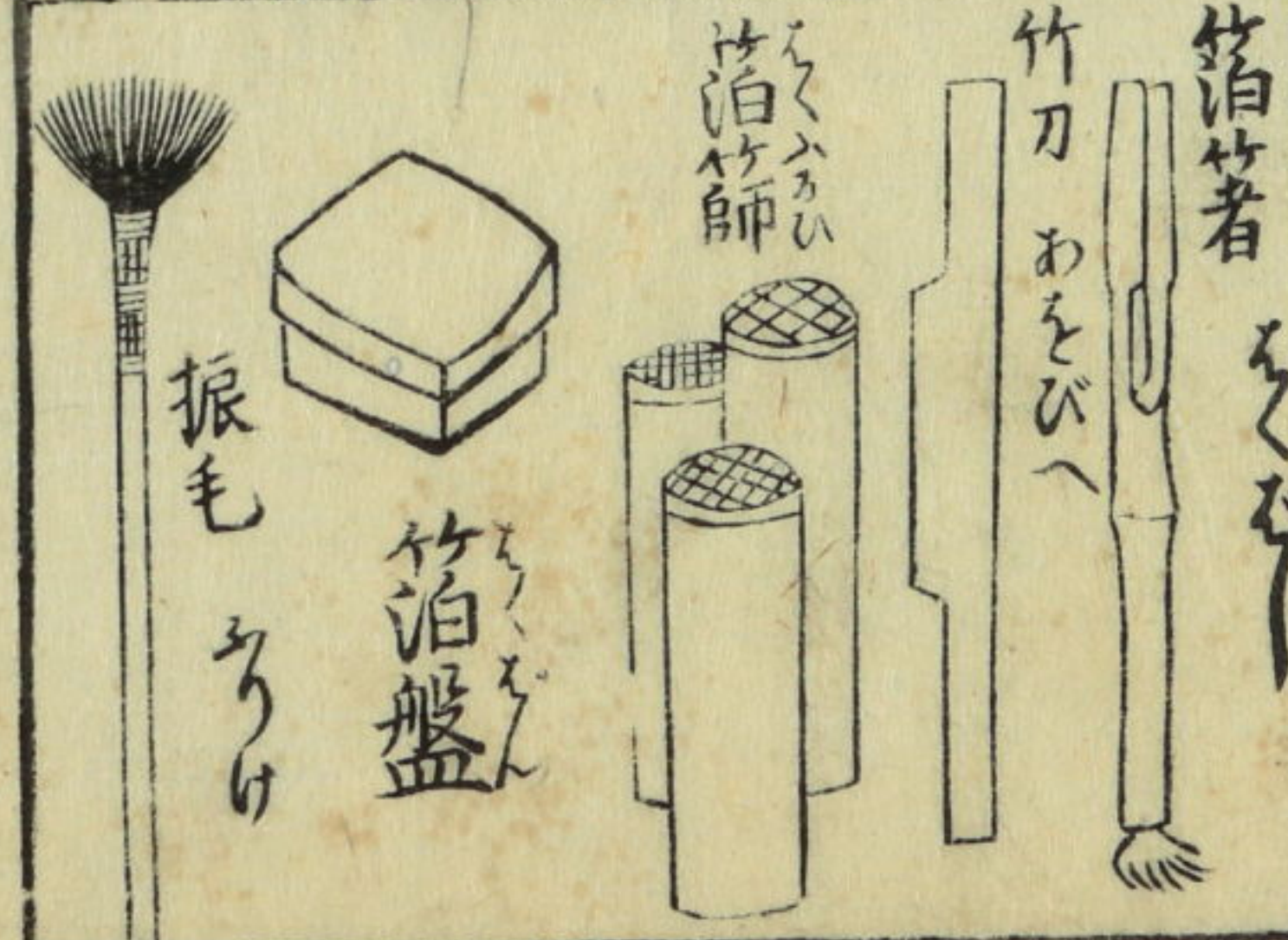
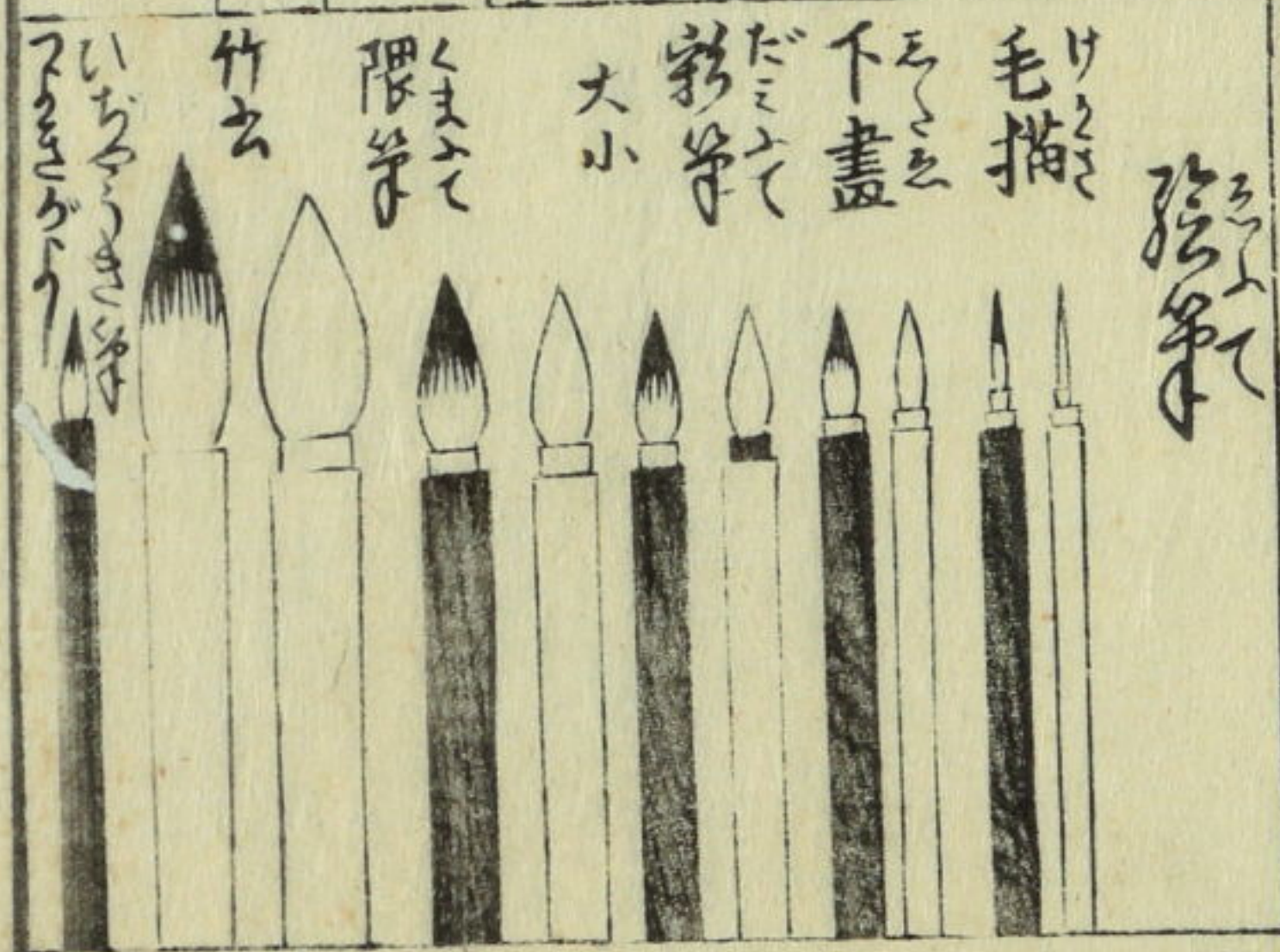
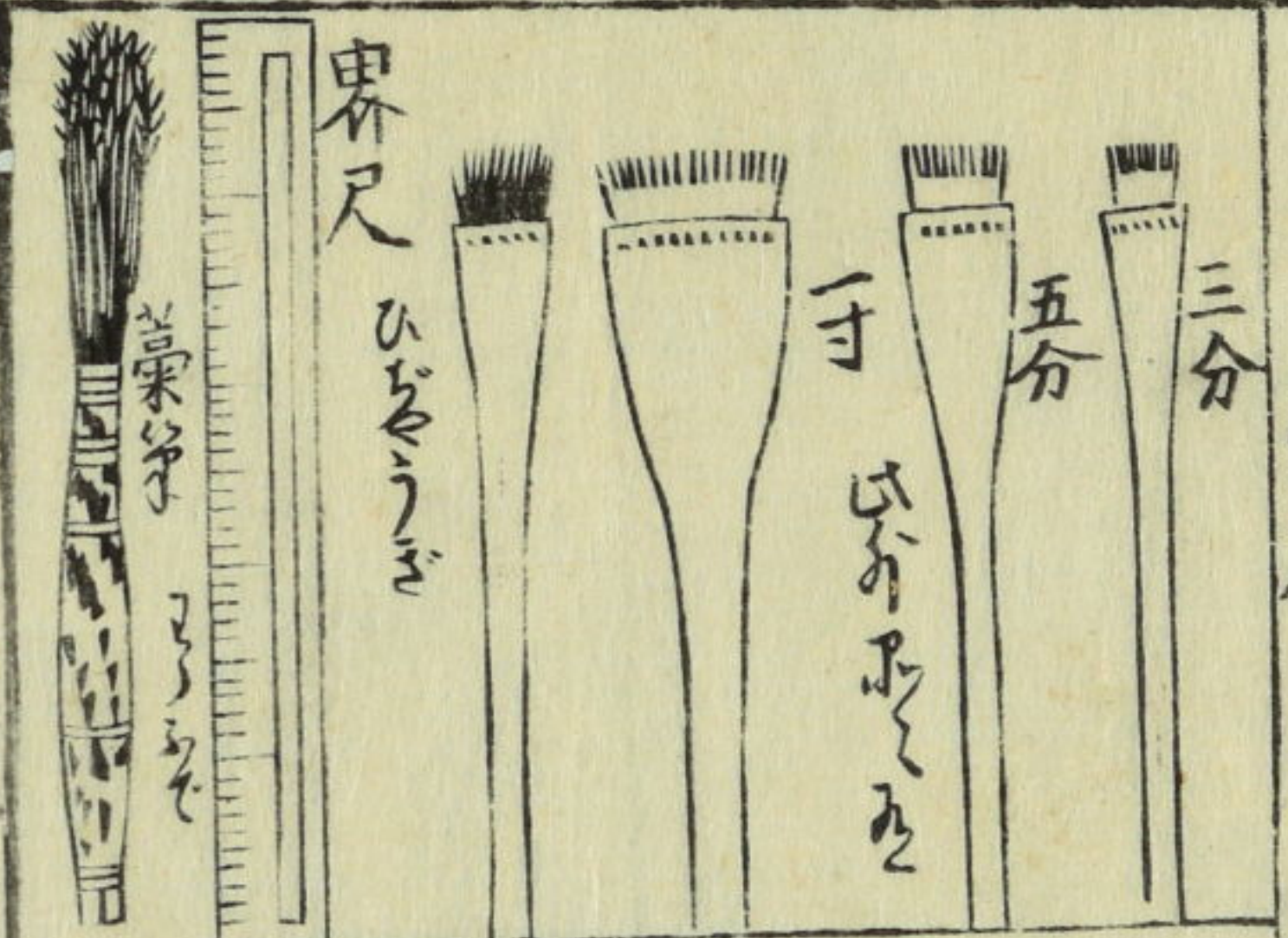
松雪朱印と押朱法



の理合は成入るものの中は線の扱は押へてよく押へてそれと先  
 紙の水とわけておいて押しをうくうり敷も製も此下の紙  
 付るものもいやくと紙はよくと月の明りより

繪刷子

三分  
五分  
一寸  
二寸三分より  
六寸より



切箔のつゝ

切箔子	微塵	小山椒	大山椒	松葉	大石と方寸或ハ一寸五分
揉み子	揉み子	揉み子	揉み子	又和とも云	小石とハ方五分

畫具之制法極秘傳

緑青 必録之石之細いよりゆる畫史曰得るの中より  
 揉むる ○ 製法ハ先録青と播き入て膠と加へるの  
 乳本を燈がし研て又との湯水とあへて膠と加へる  
 底子貼て漆と灰と一敷録青ととり又是と子の四に  
 乾乾て納て底子付と二敷録青と云又け漆水と云  
 おの碟子入て一敷一敷日と乾てこの法より時漆水と揉  
 下子付ると云はれ日と乾て揉と白録と云又次く



由り分ちたる一〇粒研まはれを強く久しく搗はる白  
 かり故よ少一研て水とよく又水も膠も合し研と扱十反  
 す魚一〇膠と入ると膠の粘と増て緑青の細末あり  
 と引出さるめし搗きよ研ぬと皮と皮搗終て後よハ  
 熱湯と次て膠と入れば又白緑礫を入ると水を少も弁  
 ずして搗きよ細く研りりさうすして搗きよ新水  
 と入ると色む濁水多成る白緑研み飽く之湯て捨る  
 時ハ白緑すくぬくはさる色白くは緑青と用は時ハ四  
 納て足水と入る浸て次ハ膠と濃煮入る餘饒入る血と  
 側て足水と投じ盡と塗へ一〇愚曰緑青をさる者  
 魚ありま白さうして足さるく光あると良しは又ま

黄ありて墨を多きハ細く目印も搗き多田の泥も  
 和ふくよあとし

二番緑青 製法ハ已よあは述る是ハ細かりぬを皮と

書よあり一〇緑青と塗術 せん白緑と以て墨を  
 浅くわり次ハ二番よそなり又一度わり一緑とくも  
 ぬる之膠と濃多入て筆端をそ交てぬる一〇わり  
 さらよ化の泥をそけりよハ搗と以て墨を搗り  
 せへ一〇若中母の時に化と若中の汁よそなりな  
 編まると二三番らる若中母の葉かとい若中の一〇  
 割曲とらよ一〇緑青とから紙葉のすこく知らよ  
 膠とらよ一〇ぬるこはらゆららぬらり



白緑 草木の根葉とかり又茎とす之初制をす  
時ハ熟湯とて糺とくわつて干野をこし

緋青 石之制を法ハ緑と同一糺と濃合して用也  
ふれと摺て群青と出ハ緑より白緑と出ハ如

大田氏曰粉中ニ摺と入て入るより候摺ハ真の  
緋青不類ハ花緋青也 凡緋青とぬるハ初法をぬる也

淡緋 畫史ハ白を俗云群青と是ハ緋青塗の括或  
衣堂云らうくとゆり或ハ群青子用也

茫緋青 礬石と燒てつら敷と云摺て糺と合て用也  
銀朱 本草ニ石亭脂と水銀とと合て化るとも摺く  
あつと入糺を合て用也上ハ漆のくると黄とことゆり

和漢朱の色同一かす和むよ

朱黄色 人面の作より用也

朱墨 朱と墨と合と他尚流ハ丹と合と膠とわいせす

黄丹 鉛と硫と合て作るとも候研と甚細末より時  
あがけ入て摺り膠と合て候也

丹臭 丹ハ鉛粉と合と用也他肉色の赤も入りなり  
肉色 丹ハ鉛粉と加ふ。朱とぬるよん肉色とゆり又丹  
と塗リたふ朱と丹と合とわり上ハ朱とぬるハ名淡紅 畫史

生燕脂 一名綿胭脂 立翁畫傳ニ調脂とわり唐より  
朱をこをとぶらあめの汁とも云燕脂とも云深こもく

古終とつら血入りて筆と以て群てることと目入り

古終とつら血入りて筆と以て群てることと目入り



不<sup>レ</sup>利又炭火の上よ墨乾すとよ<sup>レ</sup>

墨<sup>すゑ</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 脂<sup>し</sup> 生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 一<sup>いち</sup> に墨<sup>すゑ</sup> と加<sup>くわ</sup> 膠<sup>かほ</sup> との<sup>の</sup> 墨<sup>すゑ</sup> ず

生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 脂<sup>し</sup> 臭<sup>く</sup> 蛤<sup>か</sup> 粉<sup>こな</sup> 生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 下<sup>か</sup> と加<sup>くわ</sup> 小<sup>せう</sup> 淡<sup>たん</sup> 紫<sup>し</sup> 芥<sup>か</sup> 子<sup>し</sup>

墨<sup>すゑ</sup> 脂<sup>し</sup> 蛤<sup>か</sup> 粉<sup>こな</sup> 生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 下<sup>か</sup> と加<sup>くわ</sup> 小<sup>せう</sup> 淡<sup>たん</sup> 紫<sup>し</sup> 芥<sup>か</sup> 子<sup>し</sup> 蛤<sup>か</sup> 粉<sup>こな</sup> 生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 湯<sup>とう</sup> と加<sup>くわ</sup> 作<sup>たく</sup> 細<sup>さい</sup> 搗<sup>たく</sup> 膠<sup>かほ</sup> と入<sup>い</sup>

墨<sup>すゑ</sup> 脂<sup>し</sup> 臭<sup>く</sup> 生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 一<sup>いち</sup> に蛤<sup>か</sup> 粉<sup>こな</sup> と合<sup>あ</sup> 膠<sup>かほ</sup> と加<sup>くわ</sup>

胡<sup>こ</sup> 粉<sup>こな</sup> 三<sup>さん</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 白<sup>はく</sup> 堊<sup>わ</sup> 大<sup>たい</sup> 一<sup>いち</sup> と云<sup>い</sup> 是<sup>こ</sup> 去<sup>こ</sup> 之<sup>こ</sup> 胡<sup>こ</sup> 粉<sup>こな</sup> 生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup>

畫<sup>え</sup> 家<sup>か</sup> 子<sup>し</sup> 用<sup>もち</sup> ハ 蛤<sup>か</sup> 粉<sup>こな</sup> 生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 下<sup>か</sup> と加<sup>くわ</sup> 作<sup>たく</sup> 焼<sup>やく</sup> て 此<sup>こ</sup> 粉<sup>こな</sup>

舌<sup>した</sup> 搗<sup>たく</sup> て 名<sup>な</sup> と 少<sup>せう</sup> 泥<sup>でい</sup> 加<sup>くわ</sup> 一<sup>いち</sup> 粉<sup>こな</sup> 生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 膠<sup>かほ</sup> と加<sup>くわ</sup> 夏<sup>げ</sup> 月<sup>げつ</sup> ハ 必<sup>かならず</sup> ず

く<sup>く</sup> 一<sup>いち</sup> 晒<sup>ひ</sup> 干<sup>かん</sup> と 用<sup>もち</sup> て 一<sup>いち</sup>

藤<sup>ふじ</sup> 黄<sup>わう</sup> 唐<sup>たう</sup> 一<sup>いち</sup> 有<sup>あ</sup> る 海<sup>かい</sup> 藤<sup>ふじ</sup> 樹<sup>じゆ</sup> と 切<sup>き</sup> 煎<sup>せん</sup> 煉<sup>れん</sup> 一<sup>いち</sup> 作<sup>たく</sup> と 也

雌<sup>めい</sup> 黄<sup>わう</sup> ハ 一<sup>いち</sup> 丸<sup>まる</sup> 子<sup>し</sup> わ<sup>わ</sup> け<sup>け</sup> ず 四<sup>し</sup> 人<sup>にん</sup> 名<sup>な</sup> と 加<sup>くわ</sup> 一<sup>いち</sup> 搗<sup>たく</sup> 墨<sup>すゑ</sup> 湯<sup>とう</sup> 一<sup>いち</sup>

藤<sup>ふじ</sup> 黄<sup>わう</sup> 臭<sup>く</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 蛤<sup>か</sup> 粉<sup>こな</sup> と 合<sup>あ</sup> 膠<sup>かほ</sup> を 加<sup>くわ</sup>

藤<sup>ふじ</sup> 黄<sup>わう</sup> 臭<sup>く</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 蛤<sup>か</sup> 粉<sup>こな</sup> と 合<sup>あ</sup> 膠<sup>かほ</sup> を 加<sup>くわ</sup>

靛<sup>い</sup> 花<sup>か</sup> 藍<sup>い</sup> 澱<sup>い</sup> と 乾<sup>かん</sup> 一<sup>いち</sup> 帛<sup>ひつ</sup> 包<sup>か</sup> 水<sup>すい</sup> 投<sup>な</sup> じ<sup>じ</sup> 一<sup>いち</sup> 固<sup>こ</sup> 密<sup>みつ</sup> と

灰<sup>はい</sup> 汁<sup>じゆ</sup> 切<sup>き</sup> る 名<sup>な</sup> と 密<sup>みつ</sup> て 灰<sup>はい</sup> 汁<sup>じゆ</sup> 生<sup>せい</sup> 墨<sup>すゑ</sup> と 合<sup>あ</sup> 膠<sup>かほ</sup> を 入<sup>い</sup> 色<sup>しき</sup> 入<sup>い</sup>

淡<sup>たん</sup> 葱<sup>そう</sup> わ<sup>わ</sup> い<sup>い</sup> ら<sup>ら</sup> う<sup>う</sup> は 蛤<sup>か</sup> 粉<sup>こな</sup> と 合<sup>あ</sup> 膠<sup>かほ</sup> を 加<sup>くわ</sup>

草<sup>そう</sup> 綠<sup>りよく</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 苦<sup>く</sup> 綠<sup>りよく</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 靛<sup>い</sup> 青<sup>せい</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 藤<sup>ふじ</sup> 黄<sup>わう</sup> と 合<sup>あ</sup> 膠<sup>かほ</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり

ら<sup>ら</sup> う<sup>う</sup> 多<sup>た</sup> と 嫩<sup>にん</sup> 根<sup>こん</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 多<sup>た</sup> と 老<sup>らう</sup> 根<sup>こん</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 粉<sup>こな</sup> 膠<sup>かほ</sup> と 加<sup>くわ</sup>

黄<sup>わう</sup> 土<sup>ど</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 膠<sup>かほ</sup> を 加<sup>くわ</sup>

黄<sup>わう</sup> 土<sup>ど</sup> 臭<sup>く</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 膠<sup>かほ</sup> を 加<sup>くわ</sup>

黄<sup>わう</sup> 土<sup>ど</sup> 臭<sup>く</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 膠<sup>かほ</sup> を 加<sup>くわ</sup>

黄<sup>わう</sup> 土<sup>ど</sup> 臭<sup>く</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 膠<sup>かほ</sup> を 加<sup>くわ</sup>

黄<sup>わう</sup> 土<sup>ど</sup> 臭<sup>く</sup> 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 一<sup>いち</sup> 種<sup>しゆ</sup> あり 膠<sup>かほ</sup> を 加<sup>くわ</sup>



しよと云く摺てあると終つて加ふ

紫去臭 志ろり 蛤粉と合膠を加ふ

紫去腐 紫去のどとわり 夜黄とくろく 或ハ志ろり 紫去のどとわり

と合ハ或ハ志ろり 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり

雲貝 蛤粉と合膠と加ふ 角色と云 乾漚と加ふ

藍汁と云

墨臭 墨臭とわりて 夜黄とくろく 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり

福 丹と夜黄と合膠と合と 膠を入と 又朱墨 蛤粉と合

しよと云く摺てあると終つて加ふ

合黄土 去朱標と云く 夜黄と丹と合膠と加ふ

青鶴色 白綿と夜黄と加へ終つて入る 福も 萌黄とも云

金翅鳥色 白綿と若源と加へ 或ハ白六と合黄土と加ふ

肉色 福 紅紫合とも云 肉色の上と云く 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり

紅色 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり 志ろり

紫藤色 肉紅とも云 淡葛と 胆脂少く加ふ

濁色 瘰癧色 生多し 漆と合 金とくろく 終つて加ふ

金泥 箔と礫と入膠と一滴入て 中指と無名指ととわく

志ろり 研と入膠と入て 糖の上とて 湯と多く入て 敷割

敷割とわく 細末とて 泥のどとわく 湯と多く入て 敷割

形と底と取て 漆とわく 漆とわく 漆とわく 漆とわく 漆とわく

膠を加て 漆とわく 漆とわく 漆とわく 漆とわく 漆とわく

漆とわく 漆とわく 漆とわく 漆とわく 漆とわく 漆とわく 漆とわく 漆とわく



塗へー又茶を塗もよー或ハ友葵の具或ハ肉を  
 又丁子の葉湯濃して朱少友葵申入てぬるもよーし  
 黄膠 朱と藤葵と合膠を多く加てぬる  
 銀泥 銀箔をけしてつよ法ハ金泥工同ハ蛤粉膠ぬり  
 して泥と塗る

雲母 搗てぬると膠と加ハ白樺白菊の上よ少有て芝とま  
 銅青 糸線まると云本草 雁子硝と銅あり線生してより  
 晒乾とより搗て水と膠を合と又水乾して使もよー  
 銅白線 銅線ハ蛤粉を合と膠を加よ  
 黄明膠 牛乳皮を煮て作るまよかく透通らるよし  
 ぬよ浸し煮て蒲の陰まよ加よ○晒膠の方冬月よ

膠と器よ納也上よ二層と多く糖と数日を雷湯てぬ  
 とたり膠がよひて柔よぬると乾し貯て用也  
 明礬石 透らるよよー考に生を粉ありてを礬石水は  
 時よ用也

○守篤曰凡絵の事と研用らる餅煉と云とありん  
 神に乾研とて能く搗てぬるぬる入て研ぬると  
 うかひてぬるぬるぬるを添て研らる

畫彩補遺

石膏 研てぬるぬると分て三種とハ頭青二青又好ま二  
 青月又好ま一種石膏堅して碎へる者あり車垢と以



少許強入るれを便研細くして泥の如し

朱砂しゆさ すかいら辰砂しんさなりう紫頭むらさかの者と用てし

銀朱ぎんしゆ 白の朱砂しゆさをうんと銀朱と以てられし代

珊瑚末さんご 唐畫たうがの中より種の色久を磨て変せしるあり

鮮あざやかなるしと初日乃如し宣和せんわ内府印色も亦多此を用

雄黄ゆうわう 名色の法は朱砂と同一畫は黄葉と人衣ひとぎより

用の他金の上にも用ると云々金殿きんてん雄黄とつられし板

月の後焼て慘色あざむとあり

石炭せきたん 此程山名の中用は松皮しょうひ及ひ

乳金にゅうきん 金泥きんじなりうす二指と用て用ては摩ま搦な

傳粉でんこな 蛤粉かひんと角かく礬らん過とし研細けんさいあり

調脂てうし 甚色しんしき指さしよつとてきりぬり研けんて洗せんし金きん

藤黄とうわう 半はん管くわん黄わうとみつられしもの名妙めいせうと樹じゆとくも黄葉わうはつ水みづ

赭石せつせき 石せきの肉にくを入て枝幹しえかんを搗たし便べん蒼潤そうじゆんをそふ

赭石せつせき 石せきの質しつ堅かたしと色いろ麗うるはしものとおくれ製せい法ぽう石せき緑りよく

赭黄色せつわうしき 藤黄とうわうより赭石せつせきを加ふ

老紅色らうしき 銀朱ぎんしゆより赭石せつせきを加ふ

蒼綠色そうりよく 草綠そうりよくより赭石せつせきを加へ初雲しよんのふもより用也

と同一

傳粉でんこな 蛤粉かひんと角かく礬らん過とし研細けんさいあり

調脂てうし 甚色しんしき指さしよつとてきりぬり研けんて洗せんし金きん

藤黄とうわう 半はん管くわん黄わうとみつられしもの名妙めいせうと樹じゆとくも黄葉わうはつ水みづ

赭石せつせき 石せきの肉にくを入て枝幹しえかんを搗たし便べん蒼潤そうじゆんをそふ

赭石せつせき 石せきの質しつ堅かたしと色いろ麗うるはしものとおくれ製せい法ぽう石せき緑りよく

赭黄色せつわうしき 藤黄とうわうより赭石せつせきを加ふ

老紅色らうしき 銀朱ぎんしゆより赭石せつせきを加ふ

蒼綠色そうりよく 草綠そうりよくより赭石せつせきを加へ初雲しよんのふもより用也



畫學子道統相傳 並 自家傳來

僧如拙 九州人也 住相國寺 僧周文 號春育 住相國寺 小栗宗丹

狩野正信 同元信 世號嘉眼 祐雪

直信 號松榮 州信 號永德 孝信

法印守信 號宮内卿 探幽齋 法橋守房

小森俊春  
大田守章  
林 守篤

中塚氏



